

《消費者行動ネットワーク 秋の体験交流企画》

～ 二つのアルプスが見える町 ～

飯島町 200%体感企画の報告

事務局長 外山孝司

9月23日(月)、24日(火)、参加人数19名で、長野県飯島町の協力を得て、秋の交流企画を開催しました。

参加費として最初に15,000円徴収しましたが、交流・宿泊先の「アグリネーチャーいいじま」の上原マネージャーのご好意で、施設のマイクロバスで名古屋駅西口まで送迎していただくことができ、最終的に参加費は12,800円となり、2,200円キャッシュバックすることができました。ということで、参加者のみなさんは、帰りにはお土産の飯島町の果物や物産で両手いっぱいになり、次回の体感交流企画を期待する声がたくさん出されました。

来年春、また体感交流企画を計画しますので、ご期待ください。

以下、体験交流企画の内容について、報告します。また、参加者3名から、レポートを提出いただきましたので、併せて掲載します。

《9月23日(月・祝日)》

10時00分 名古屋駅西口に集合
12時00分 「アグリネーチャーいいじま」到着、昼食のメニューはソースかつどん
13時00分 上原マネージャーから「アグリネーチャーいいじま」の自然体験施設の案内栗林での栗拾いは、いつもとみなさんの目の色が違っていました。
14時30分 飯島町が進めようとしている与田切川流域での小水力発電について、現地を見学しながら、飯島町小水力発電推進

協議会会長の浜田さんから話を聞いて交流しました。

17時00分 夕食、交流
19時00分 三国花火を見学体感
仕掛け花火の高い筒から吹き出す火の粉が勇壮な祭りを盛り上げました。三国とは甲斐・信濃・駿河のこと。9月中旬から10月上旬に掛けて町内各所の神社で開催。9月23日は田切の日方磐神社で行われました。

《9月24日(火)》

8時00分 朝食
9時00分 飯島町産業振興課長の唐澤さんから、飯島町の農業を始めとする産業の実情と今後の展望について、元コープあいち職員で駒ヶ根で現在ぶどう作りをしている三浦さんから農業へ転職するにあたっての想いなどについて、また、道の駅花の里いいじま利用組合長・農事法人いつわ代表理事で、水田・農産加工実践者としての体験談について話を聞いて交流しました。
12時00分 昼食は、蕎麦名人の斎藤さんが打った蕎麦を賞味
13時00分 飯島町のリンゴ & 梨生産者の藤木さんの果樹園で、「豊水」の冷害被害の実態を見ながら話を聞き、収穫体験をしました。
15時00分 帰路
17時00分 名古屋駅西口で解散

「アグリネーチャーいいじま」は、農業、陶芸、炭焼き、乗馬といった本格的な自然体験ができる総合交流拠点です。



クリックで拡大



日方磐神社の三国花火。仕掛け花火の高い筒から吹き出す火花の下で気負う神社の氏子衆！！



～二つのアルプスが見える町～

飯島町の小水力発電計画

●「飯島町自然エネルギー推進協議会」会長 浜田 稔さんの説明を聞いて

国土交通省は2013年3月に砂防ダムを利用した発電可能性について発表した(長野日報記事より)。

しかし、町は砂防ダムから直接取水する発電は事業化のための技術的・法的課題が多いので、より制約の少ない用水路発電を目指すとした。幸い、町内の与太切川にある砂防ダムに慣行水利権があり下流の水田まで用水路がある。これを利用した用水路発電を計画することにした。課題は土砂対策。発電水車磨滅による稼働率低下の最大原因だからだ。

砂防ダム。右側の壁が用水取水施設

用水路発電計画を事業化するため、「自然エネルギー推進協議会」が2013年8月3日に設立された。協議会の特徴は10年間の時限組織としたこと。10年もすればエネルギー状況が変わるから現在の協議会は見直すべきという考えだ。

もともと飯島町の地形は与田切川の急流と段丘地形により発電落差を得やすいことから、町は将来目標として太陽光・熱3,300KW、小水力350KWの自然エネルギー発電により町電気使用量の35%を確保するとしている。電力事業者へ売電せず地元消費が前提となっているのだ。



次の写真は用水路の例。急流なので小型発電機を設置すればすぐにでも発電できる。実際にも試験的に行っている個人もいるということだ。課題は用水路使用权者の理解と同意である。

法的にはこのような発電の場合は通常の水利権取得手続きと比べて手続きの簡略化が認められているが、個人では権利取得に無理があるので事業法人を作る必要がある。

この点では、飯島町町民の意識は高いという。協議会メンバーは町民(中電OB、農家など多様)、各種団体、町内事業者、行政、地元金融機関で構成され、事業化にあたって資金手当てを含めた具体的な検討ができるメンバーが集まっている。

協議会は理事会を2週間に1回の割合で開催するというハイペースで検討を進めている。



しかし、現時点では小水力発電事業化のための調査・研究を目的として先進地見学会などを行い町民の知識蓄積中の段階だ。

協議会は事業化のための土台という位置づけなので協議会が事業を行うものではない。社会的企業としての発電事業を目指すため資源エネ庁に補助金申請中だが、申請では以上のことを踏まえて2年という短期で事業化するとした。

また、会員の意見を踏まえて小水力以外の勉強もすることになっている。家のエコ化(断熱改修など)、木質バイオなどが候補に挙がっているが、現在、設立1.5ヶ月なので勉強段階。

実際に発電機を置くとすると情報不足があると近隣住民にとっては騒音など不安があるので、①丁寧な説明と理解、②町内消費原則、

③利益の地元還元が外せない原則と考えている。発電事業も地域自立の一つの手段である。

同様事例は全国にあるが、名古屋市近隣事例として三重県の立梅用水土地改良区の進める小水力発電プロジェクトがある。飯島町の構想を絵にするとこのようなものと思われるが、立梅用水もまだ調査研究段階である。試験的な導入事例はよく聞くが、一応の事業として形になった事例は聞かない。事業化にあたっては関係者の理解や、技術的・法的課題があると聞くが中山間地域の高齢化・人口減少は加速している。その対策として、事業化が間に合うことが期待される。

www.tachibai.jp/hatuden/hatuden9.21.pdf

たちばいようすいがたしょうすいりょくはつでん
立梅用水型小水力発電プロジェクトにおける調査
Power of the TACHIBAI ~次の200年へ~

立梅用水型小水力発電プロジェクトとは 「地産地消型エネルギー利用」の理念

(仮)1号実験機

世界初!

およそ200年前、細田川をせきため、全長30kmにも及ぶ農業用水(立梅用水)を作り上げました。もちろんこの目的は新田を開発し、お米を作ることでした。200年を守り続けてきた立梅用水は今、新たな役割を担うこととなります。それは、農村地域活性化や6次産業促進を図るために必要な電力エネルギーを生むというものです。このプロジェクトでは電力エネルギーを地元で消費する「地産地消型」として利用する仕組みづくりを今後、調査していきます。

実験サイトの農業用水路が持つエネルギー

①最大エネルギー:約5,760w 1日運転すると・・・ 一般家庭:13戸分相当 CO ₂ 排出削減量:5人分	②実験機のエネルギー:約400w 1日運転すると・・・ 一般家庭:1戸弱分相当 CO ₂ 排出削減量:0.3人分
--	--

自然の仕組みから生れた画期的な小水力発電装置は自然のパワーを活用した農村の宝もの。農業用水路が有する凄いエネルギー。

今回、50cmの小落差で実験!

地産地消型エネルギー利用の理念に基づく循環経済を推進する協働プロジェクト

民チーム 多気町勢和地域資源保全・活用協議会 自治会、ゆめ工房、まめや、営農組合など多様な主体	官(行政)チーム 水土里ネット立梅用水、多気町、三重県、 水土里ネットみえ(旧オゾナーター)、農林水産省東海農政局(旧オゾナーター)	産学チーム (株)協和コンサルタンツ、九州工業大学、 東京農業大学、(株)テクエイト
--	---	---

立梅用水型 小水力発電機 地産地消 マップ

世界初!!

長野日報ホームページ (2013-3-29) より

<http://www.nagano-np.co.jp/modules/news/article.php?storyid=28081>

国土交通省天竜川上流河川事務所は 28 日、管内の砂防施設を使った小水力発電の可能性調査の結果を公表した。同事務所が管理する砂防堰堤（えんてい）など 147 施設について、発電施設を設置した場合の最大出力と建設単価を算出。上伊那地方では飯島町の与田切川にある「飯島第 2 砂防えん堤」で副堤下流放流を使った場合に、最大出力 380.6 キロワットを確保できると試算した。

「飯島第 2 砂防えん堤」は有効落差が 20 メートル以上ある上に流量も多く、年間発生可能電力量は 1911 メガワット時が見込めると試算。1 キロワット時の電力を得るのに必要な建設費用（建設単価）は開発判断の目安とされる 250 円を下回る 186 円となった。同堰堤の下流にある「飯島砂防えん堤」も有望で、最大出力は 376.4 キロワット、建設単価は 164 円と計算された。

飯島町（長野県）200%体感企画に参加して

川口 幸男

1. 参加のきっかけ

「生きがいコープ」の広報誌で飯島町体感企画を知りました。企画参加にあたっては、

- (1) 小水力発電では、以前に高野雅夫さん（名古屋大学院教授）の「1000年持続社会」を実現する為に、実践的な活動を聞いて、エネルギーの地産地消について更に問題意識を深めたいと思いました。
- (2) 生産者との交流では、現在、家庭菜園（100坪）をしながら仲間25名で協同農園（450坪）を営んでおり、農業問題・地域問題にそれなりの関心がありました。
- (3) お楽しみ企画では、りんご等の収穫体験に期待を持ちました。

2. 与田川流域での小水力発電について（飯島町自然エネルギー推進協議会会長浜野さん）

- ①始めに、S50年代に稼働した水力発電（6300kw）を見学。その後、小水力発電の候補になっている「砂防えん堤」を見学。
- ②小水力発電の出力は350kw（飯島町の約2割を賄う）、建設費用は2.5億ぐらいを見込む。
- ③昨年より、自然エネルギーに関して、講演・映画会等で地域の関心を高め、今年8月に自然エネルギー推進協議会設立総会を開催。
- ④町内で発電を事業化するには最短でも2～3年はかかるが、大企業の事業ではなく、地域住民が主体になって取り組んでいく。

3. 農業振興課・生産者との交流

(1) 飯島町産業振興課課長（唐澤さん）

- ①飯島町は町の3/4は山林で水田（700ha）、畑（90ha）、果樹（90ha）。
- ②人口9900人（9/1現在）65歳以上は30.8%の比率

③農家戸数は1100戸（全戸数の約1/3が農家戸数）で販売に関わっているのは750戸ぐらい。（専業は140戸）

④集落全体として農業を発展させる為に、4つの地区毎に営農センターをS61年に設立。

水田面積の拡大に取り組んだが、法人でやっても50haが限度。

⑤果樹はピーク時には100haあったが現在は90haに減少。今年は春先の遅霜でなし「南水」とかきは壊滅状態。

⑥道の駅「花の里いいじま」は2002年にオープン。総工費2.8億（半分は国の補助）で年間約20万人、利用売上は2.7億。

⑦農業の担い手不足、高齢化、販路路が中々見つからない等の課題を抱えている。

⑧農業を活性化させる取り組みとして、栗の生産・加工を重視（栗の産地化を目指し現在25haを将来50haにしたい）、そばの種づくり、きのこの生産、大学関係や地域住民との直接繋がりを作っていくことを重視したい。

(2) 生産者（元コープあいち職員三浦さん）

①4年前にインターン研修制度（最大3年間月額13万円補償し、新規就農講座に参加）を利用して就農し、ぶどう作りをしている。

②ぶどう（果樹）は、手間・暇がとにかくかかり、サル・鹿・カラス等の被害が多い。

今年は900房を収穫。

③販路は個人間取引を重視したい。消費者には、ぶどうの作業現場をみていただきたい。

(3) 道の駅花の里いいじま組合長（林さん）

①林さんは、28歳から6期議員を経験。

②地域で産業として農業後継者を育成する為に農業法人化検討・設立。

③農産加工を重点（栗・そば等）

4. 感想

(1) 全体として

①飯島町の産業の現状やこれからの取り組みについて、3人の方からの報告・意見交換できたことは、中山間地の農業問題を深めていく契機となった。

又、小水力発電の現地見学は、各地で広がっている自然エネルギーの取り組みについて一層関心を持つことが出来た。

②お楽しみ企画では、秋祭りの奉納として花火行事が見られたこと、JA 協同選果場や梨生産者のお話・収穫体験を企画に盛り込んでいただいたのは、大変良かった。

③飯島町は、遠くのアルプスを背景に豊かな自然には飽きないものがあり又、訪問したくなります。宿泊施設の「アグリネーチャー」は、見晴らしの良い緑の中にあり、個人・団体が宿泊でき、小奇麗であった。

(2) 個別には

①飯島町の秋祭りに奉納行事として行われる花火（打ち上げ・仕掛け・大三国）は、23日には、仕掛け・大三国花火は田切日方磐神社内で行われ、その壮大な光景には圧倒されるばかりであった。

②菊池秀行さんには、リンゴ（秋映え、紅玉、晃林）なし（20世紀、南水）ぶどう（スチューベレ、ピオーレ、ナイアガラ）等試食させてもらい大変良かった。

5. 今後に向けて

(1) 今回の体験交流に参加して、都市住民と中山間地の住民がもっともっと繋がりを強化できないのかという思いを強く持ちました。

都市住民が求めているもの（新鮮でオリジナルな食品、豊かな自然、地域の伝統的な文化に触れる等）と、中山間地が求めているもの（販路の拡大、農業の担い手づくり、雇用の場の確保等）うまく繋げていけば大変面白い活動がもっともっと出来そうな気がします。

(2) 外山事務局長の話では、来春にも飯島町との交流企画を開催予定との事ですが、ぜひ継続発展させていただきたいと思います。その為には、飯島町の取り組んでいる内容について更に深める必要性を感じています。又、自分が住んでいる地域でも、中山間地との交流促進をどう図っていくのか検討予定。

(3) 飯島町では今後の課題の一つとして「小さな販路の拡大」が挙げられています。

この1. 2年自分が住んでいる一宮市周辺でも、朝市が随分と増えました。朝市は、地産・地消が基本ですが、中山間地の特色ある商品を紹介する場があれば朝市の魅力が増します。物流をどう組み立てるかがネックになりますが、出来るところから始めたいと思っています。



飯島町体験交流企画に参加して

アムネスティ・インターナショナル日本 「わや」グループ
中島 正人

アムネスティグループの月例会に参加している外山さんの紹介に、思わず興味と関心が高まりすぐに参加を決めました。長年山歩きを続けてきましたが、伊那谷の大鹿村に縁があって何度も足を運んできました。飯島町は天竜川を挟んで、その反対側の山の麓にあたります。「二つのアルプスが見える」いいところだとすぐ想像がつかしました。

今まで通り過ぎることは幾度もあっても訪れたことはありません。遊び半分の気持ちで参加した1泊の気ままなバス旅行でしたが、手応えは予想をはるかに超えたものでした。

宿所となった「アグリネーチャーいいじま」が、あの財界人士光敏夫氏に縁がある横浜の橘学苑という学校の農業体験施設としても使われていることも、ちょっとした驚きでした。

農地の所有と利用を分離して町内4地区の営農組合によって協同で営農計画をつくり、町全体の農地を営農センターが「自然共生」を理念とした農場として経営していく事業に、長年取り組んできた町の当事者から熱い話が聞けました。国の農業政策との長い闘いが垣間見えました。いわゆる平成の大合併の流れにも抗して、住民投票によって駒ヶ根市との合併話も退けたと言います。蕎麦どころ長野県全域の蕎麦の種子が、この飯島でまかなわれているとも聞きました。美しい蕎麦の花畑を目にすることができました。

「スウェーデン～祝島 エネルギーの未来を切り開く人々」という副題の映画『ミツバチの羽音と地球の回転』の上映会を昨

年の2月に開催。町の公民館の会場が350人以上の参加者であふれて大成功。1000円の参加費の黒字額を、町に寄付したことで政治的な力も得て力強く動き始めたという小水力発電。地元の豊かな農業用水を使って町内の電力をまかなおうとしています。背景には、あの「3・11」の残したのもあったそうです。

お隣の駒ヶ根に移住してぶどう栽培に取り組むMさん。4年前まで名古屋市の生協職員だった彼からも話が聞けました。都会の生協で働く中で「モノを捨てるシステム」の自己矛盾などに耐えられなくなったと言います。病害虫と闘う苦労話、安易な夢だけでは済まない自然相手の厳しさも伝わってきました。彼の自慢のぶどうが食べたくなりました。

夜には三河系筒花火の「三国花火」の迫力ある花火大会も堪能しました。ソースかつ井に手打ち蕎麦、りんごやナシに栗拾いと地元の食材にも触れられました。

現地と都会に住む我々がつながっていくことの意義を実感できた旅でした。

